

媽祖と観音

—文献と図像に基づく再検討—

張 凱

はじめに

航海・漁業に従事する者の命を守る女神として信仰される「媽祖」¹は、中国において最も影響力の強い民間信仰の一つである。媽祖信仰は他信仰と習合しながら、中国沿海部を中心に拡大し、さらにはマカオ、ベトナム、タイ、日本などの国々にも伝播した。このように諸外国に伝播し、地域化を遂げた背景には、媽祖信仰の説く「海難から人々を救う」という救済者としての特質が深く関わっていると考えられる。

媽祖信仰を多角的に見ると、仏教と道教から大きな影響を受け、両方の面影があることが分かる。このため、媽祖信仰と仏・道二教の関係については、今でも学者の間で論争が行なわれている。²さらに、一部の道教説は、媽祖信仰の祭祀儀礼や巡行などに見られる道教的要素を根拠として、媽祖信仰と仏教系の観音菩薩との間に存在する関連を一切認めない。

しかし、文献資料および現地調査の結果から見ると、媽祖と観音、更に媽祖信仰と仏教が交流しているのは事実である³。

¹ 「媽祖」という呼称は明代から用いられ始めたと推測されているが、清代以降の関連文献には、この呼称が出ることがない。「媽祖」という呼称について、蔣維鈺（1992）を参照。しかし、現在、「媽祖」という呼称が最も広く一般人に認知されている呼び方である。このため、本論では、「媽祖」という呼称を使う。また、「天妃廟」・「天后廟」も「媽祖廟」で統一する。

² 仏教との関係性を認める先行研究には、李豊楙（1993）、釈厚重（2005）などがある。道教との関係性を認める先行研究としては澤村幸夫（1994）、王福梅（2010）などがある。一方で、この二つの見方のほか、平木（1984）の「実際の民衆の信仰レベルでは、両者が渾然と融合しているのをみると、両者を分断して研究している限り、ことの真相は明らかになってこない」という見方もある。

³ (1) 台湾雲林県北港鎮に位置する朝天宮の媽祖巡行は、台湾の各巡行の中では非常に有名である。興味深いのは、行列に媽祖の人間界の両親（聖父母）が参加できないことである。しかし、仏教的関連をもつ観音菩薩と阿彌陀仏は行列の最優位に位置付けられている。巡行の順番は以下になる。天宮の媽祖巡行について、神輿

従来の研究方法は、主に文献資料を通して、媽祖信仰と仏教あるいは道教との交渉の経緯を辿ることによって媽祖の起源を分析してきた。その他に、文献資料と現地調査の双方から行われた研究もあるが、それらの研究では、祭祀儀礼にもとづいて道教由来の方法であるとして紹介されることが多い。また、媽祖廟の壁画についての研究もあるが、壁画に描かれる全ての場面を美術学の立場から論述することが多い。観音と媽祖の関係に対し、最も重要な「天妃誕降」の場面を、文献資料と壁画の双方から分析するという研究は、まだなされていない。

本論は、「天妃誕降」という場面を通して、現存する壁画の場面の根拠となる文献資料から、媽祖と観音の関係について再検討するものである。

1. 媽祖と観音の関係の三類型

多数の壁画に描かれた「天妃誕降」は、観音と媽祖の関係を提示している。媽祖と観音の関係は以下の三種類の説に分類できる。

- ① 媽祖は観音の脇侍龍女である。
- ② 媽祖は観音の化身である
- ③ 媽祖は観音の弟子である。

まず、①「媽祖は観音の脇侍龍女」の説には、三つの考察すべき要素がある。一つ目は、直接的に両者を結び付ける文献資料である。例えば、最初に媽祖を龍女とする文献は「順濟聖妃廟記」

の順番は何十年も変わらず、観音と阿彌陀佛は最高の地位を保っている。

1 太子爺、2 虎爺、3 笨港境主、福德正神、4 註生娘娘

5 千里眼、順風耳、6 六媽、7 五媽、8 四媽、9 三媽

10 二媽、11 祖媽、12 観音佛祖、13 阿彌陀佛

(2) 図 1 参照。多くの媽祖廟では、媽祖の本尊である媽祖像が安置されている媽祖聖母殿（内陣）が、拝殿（外陣）と同じ場所に祀られる。本堂とみなされる媽祖聖母殿の次には、寢殿とも呼ばれる観音菩薩殿がある。寢殿と呼ばれる理由は、媽祖は観音を信仰し、自分の寢室にも観音像を安置したという伝承からである。観音菩薩殿には、観音菩薩以外にも、釋迦牟尼仏、阿彌陀仏、彌勒仏及び十八羅漢が祀られる。そして、次は媽祖の両親の聖父母殿である。

(3) 建造物の配置により、観音が媽祖信仰の中で高い地位を保っていることが分かる。また、仏教とも親密な関係を持っている。また、祖廟を含めて一部の媽祖廟は、初期には、仏教の僧侶が住持を担当しており、朝天宮の信者たちは仏教の經典を学んでいた。

(4) 蔡相輝 (2009) によると、台湾の媽祖廟を代表する朝天宮の歴史において、朝天宮への媽祖巡礼は当初、媽祖廟に常駐する僧侶たちによって行われた宗教的行為である可能性が高い。

である。この次の会要所で編纂された『宋会要輯稿』（略称『宋会要』）は、媽祖を祀る「張天師祠」、「神女祠」、「順濟廟」という三つの祠（堂）廟に封号が与えられたことを記録した資料である⁴。二つ目は、次章で説明するが、媽祖の家柄である。三つ目は、三教と融合する順序は最初が仏教であるということである。明言はできないが、宋代の「順濟聖妃廟記」に「龍女」という言葉が見られることから、恐らく宋代後期に観音と媽祖に関わる説話や物語が既に存在したかもしれない。

次に、②「媽祖は観音の化身」の説に関して、元代の黄四如は『聖墩順濟祖廟新建蕃釐殿記』の中で「即補陀大士之千億化身也」と記しており、媽祖が観音の無数の化身の一つであることを明白に示している。この説の賛成者は、例えば壁画の素材の一つの『天妃顯聖録』の序文を書く明代神宗時期の林堯俞である。また、石像の方から見れば、元代の媽祖金身は男性の姿であり、同じく観音の化身と見なされる泗洲文佛に関係がある。宋代において非常に盛んであった泗洲文佛信仰との融合は、媽祖が観音の化身となる一つの過程にあったと考えられる⁵。

⁴ 龍・龍女と媽祖の関係について、以下の三つの文献資料が重要となる。

①丁伯桂、1230年、「順濟聖妃廟記」

②歴代勅、1173-1210年、『宋会要輯稿』

③潜説友、1268年、『咸淳臨安志』

⁵ 泗洲文佛とは、僧伽（628-710）が没後に賜った諡号である。僧伽は戒名である。彼は西域・スィアブの出身で、出家する前の姓は「何」であった。唐高宗顯慶四年（659）には唐の涼州で、唐高宗龍朔元年（661）には泗洲（今の江蘇省）で説法を行う。以前、皇帝は萬回禪師に「僧伽とは一体何者だ」と尋ねた。その際、萬回禪師は「観音菩薩の化身」と答えたのである。このため、後に観音の化身として信仰を集めた。唐代から誕生して宋代に大きく発展した泗洲文佛信仰も観音や媽祖と密接な関わりを持っている。

『佛祖歴代通載』卷十二、（四十二・戊申）、T49, no.2036, p.587, c14-23

泗洲大士僧伽詔入宮供養...有旨命大士致雨。僧伽以瓶水散洒...異香郁然。傾都歎異。遂奉全身歸泗洲普光王寺建塔。帝嘗問法雲公萬回曰。僧伽何如人。對曰。觀音大士化身耳...

『蘇東坡全集』卷九十五・贊八十首、世界書局1936年版

盲人有眼不自知，忽然見日喜而舞。

非謂日月有在亡，實自慶我眼根在。

泗洲大士誰不見，而有熟視不見者。

彼豈無眼業障故，以知見者皆稀有。

そして、③「媽祖は観音の弟子」の説は、道教の文献によく見られ、これについては次章で詳しく述べる。元代の黄四如は媽祖を観音の化身であると見なしたが、後に、明代の『太上説天妃救苦靈驗經』は、媽祖を観音の弟子として道教の神統譜に組み込んだ。⁶それ以降も、同じく明朝に編集された『太上老君説天妃救苦靈驗經』では、媽祖が「北斗の降身」であると述べながらも、観音から仏法を授かったとも述べている。この変化から、道教が最初は仏教系の媽祖観音化身説を採用していた状況がわかる。

文献によれば、以上であるが、現在の媽祖信仰においては、媽祖と観音が同一であるという觀念が広くいきわたっている。これは外国への伝播及び「媽祖」という呼称の由来と関係がある。⁸台湾では媽祖を「媽祖菩薩」、「媽祖佛祖」と呼んでいる。これらは非常に興味深い呼称である故、筆者が現地調査した際に、学者・媽祖廟関係者・信者を含め 20 人以上に尋ねた。答えはほぼ同じであった。観音菩薩は親しみやすい存在として民衆に信仰されているから、母のようなイメージがある。一般民衆は、普段からよく、観音を観音「媽」、または観音佛「祖」と呼ぶ。この呼称に、「媽祖」が観音「媽」の化身であり、また観音佛「祖」の輪廻転生した姿を意味することをそれとなく示しているのである。さらに、「媽祖」という呼称の由来は、元々観音から変化したとする見方もこの呼称の中に隠されている。先行資料によれば、「媽祖」という呼称が用いられ始められたのが清代である⁹。つまり、媽祖観音同一説は、最も遅れて生まれたと考えられる

若能便作稀有見，從此成佛反如掌。

傳摹世間千萬億，皆自大士法身出。

麻田供養東坡贊，見者無數悉成佛。

また、張凱（2018）、蔡相輝（2016）pp.344-358 参照

⁶ 菊地章太（2017）参照

明代、最初に媽祖を観音と関連させるのは明代の道教の書物『太上説天妃救苦靈驗經』である。

「齊天聖后。觀音化身。湄洲顯跡…」

1992 年巴蜀書社刊『太上説天妃救苦靈驗經』藏外道書第三冊は、明永楽 12 年（1412）からの道教書籍の内容を整理したものである。同書 p. 785B では、「齊天聖后。觀音化身。湄洲顯跡…」と記される。

⁷ 『太上老君説天妃救苦靈驗經』、北京白雲觀道教總會に現存する。初刊は永楽 14 年（1416）、後に明正統『道藏洞神部』に収録された。

⁸ 菊地章太（2017a・b）、藤田明良（2006）参照

⁹ 例えば、媽祖という呼称の源について論じるものに、台湾説を支持する蔣維綏（1992）、陳元煦（1999）、郭志超（2004）がある。彼らは媽祖信仰の源流をめぐり、以下の三つの方面から、媽祖という呼称の正当性と、この呼称が広く用いられる原因について検討している。

が、それに対する、文献的根拠は非常に不足しており、一般民衆の間での信仰の域を出ていない。

上記の三つの説に関しては、他の説との成立順序を判断できないが、ある説が他の説より流行する時代がある。例えば、宋・元時代の場合、①と③説が流行していたようである。明清以降、特に民国時代（1911年）から、媽祖を観音の化身として見るのが普通だと考える学者が現れる。李世偉（2019）の考え方は、一部の台湾の学者、民衆と同じである。現在は地域によって異なる見方を持っている場合が多い。

明代以降に続々と現れた「天妃誕降壁画」及びその素材となった「媽祖伝奇類」は、媽祖と観音の関係に関する以上の三類型のいずれかに基づいている。

2. 「天妃誕降」に関する図像と文献

壁画は、媽祖の物語を人々に知らせる存在として、多数の媽祖廟の壁・天井などに描かれている。現存する壁画の例は、例えば、中国における南京天后宮、天津天后宮、福建省楓塘宮、泉州天后宮、仙遊楓亭靈慈廟、台湾における台南大天后宮、鹿港天后宮、関渡宮などがある。

観音が媽祖信仰における重要な役を担うことから、高い地位を持つという根拠は「天妃誕降」の場面からも見られる。各媽祖廟のほとんどに「天妃誕降」という壁画があり、観音菩薩が必ず登場する。

しかし、壁画制作に当たり参考された文献とその文献への理解によって違いが見られる。また、多くの媽祖廟、例えば北港朝天宮は媽祖と観音の関係を述べる文献を典拠とし、観音殿と聖父母（媽祖の両親）殿の場所が意図的に設置された。

本章は、媽祖伝奇の中で観音が登場する「天妃誕降」という有名な場面を検討する¹⁰。多数の

蔣維鈞と陳元煦は最初に「媽祖」という呼称が用いられた場所は台湾であり、時期は清末であると論じている。郭志超も台湾説に賛成するが、用いられ始めた時期については、康熙二十四年（1685）に蒋毓英が編纂した『台湾府志』と康熙三十六年（1697）に郁永河が著した『竹枝詞』を根拠に、「媽祖」が用いられ始めた時期を康熙時代としている。また、明代からの可能性を挙げる説もあるが、根拠不足から本論では採用しない。

また、以上の研究者と異なり、徐曉望（2007）は、使い始められた場所を厦門とし、康熙二十四年（1685）から康熙三十六年（1697）に至るまでが、「媽祖」という呼称が用いられ始めた時期であると主張している。

¹⁰媽祖信仰に関する文献資料として、主に以下の五点を参考にした。①『天妃顯聖録』『天妃誕降本傳』は『台湾文献叢刊・第77種』に収録される。②『天后聖母聖跡圖誌』（1832）③『媽祖信仰の研究』（1979）④『媽祖文獻資料彙編』（2007）⑤『天妃娘娘媽』（1990）

注意すべき点は、媽祖が元々実在の女性だったのかということについて、二つの説がある点である。一つは、媽祖が宋代の福建省興化府莆田県の湄洲島で生まれた林氏の娘であり、死後に航海・漁業などの女神になった

壁画や清代の媽祖絵本などはこの場面を描く。しかし、現存する「天妃誕降」の壁画は明代以降のものだけである。このため、以下で紹介する壁画及び関連する文献は明清時代のものに限定される。

「天妃誕降」の壁画の作成に当たっては、必ず以下の書籍が参考にされている。清代の書籍はほぼ明代の内容をそのまま用い、編集されたものである。

- 1、明・『天妃娘娘伝』
- 2、明・『天妃顯聖録』『天妃誕降本傳』
- 3、清・『天后聖母聖跡圖誌』
- 4、清・『勅封天后志』

本論では、この4つの文献のうち、最もよく用いられているに『天妃顯聖録』『天妃誕降本傳』を紹介する。¹¹

媽祖は本来、福建省莆田市の湄洲に実在した人物である。媽祖は林默娘という名前で、名門の莆田唐九牧林の一族である。莆田九牧とは、最初、唐代の皇太子の家を管理する太子詹事という官職の林披公の九人の息子のことである¹²。父の林披公と九人の名声を称える意を込めて「九龍」

という説である。もう一つは、元末の劉基（「台州路重建天妃廟碑」）と清代の趙翼（『陔餘叢考』第35巻の内容参照）たちが主張する、媽祖が実在しないという説である。本論は媽祖が実在の人物であるとする説を採用する。

¹¹ 『天妃顯聖録』の成立年代については多数の研究がある。初版は明代と推測されるが、参考書籍は清代修訂版の再録本である。現在、台北中央国立図書館台湾分館と国立国会図書館にある。

『天妃顯聖録』『天妃誕降本傳』

天妃 莆林氏女也。始祖唐林披公、生子九、俱賢。當憲宗時、九人各授州刺史、號九牧。林氏曾祖保吉公、乃邵州刺史蘊公六世孫州牧園公子也。五代周顯德中為統軍兵馬使。時劉崇自立為北漢、周世宗命都點檢趙匡胤戰於高平山、保吉與有功焉。棄官而歸、隱於莆之湄洲嶼。子孚承襲世勛、為福建總管。孚子惟愨諱顯、為都巡官、即妃父也。娶王氏、生男一、名洪毅、女六、妃其第六乳也。二人陰行善、樂施濟、敬祀觀音大士。父年四旬餘、每念一子單弱、朝夕焚香祝天、願得哲胤為宗支慶。歲己未（周世宗顯德六年、九五九）夏六月望日、齋戒慶賀大士、當空禱拜曰：『某夫婦兢兢自持、修德好施、非敢有妄求、惟冀上天鑒茲至誠、早錫佳兒、以光宗祧！』是夜王氏夢大士告之曰：『爾家世敦善行、上帝式祐』。乃出丸藥示之云：『服此當得慈濟之貺』。既寤、歆歆然如有所感、遂娠。二人私喜曰：『天必錫我賢嗣矣』！

¹² 林氏の始祖は林堅である。林皐は林氏一族の第三十九代目にあたる。媽祖の祖先である林蘊はこの一族の子孫とされる。

と呼ばれている。そして、唐代、この一族の子孫である林蘊が父のために建てた「陸州刺史府君神道碑」（墓誌）には、「故相國常公袞問福建……語於賓伴曰：現林公出處，其猶龍乎」と記されている¹³。媽祖の父は五代の閩王¹⁴の時の官僚林願であり、母は王という姓である。媽祖は林願の第六女である。媽祖の両親は観音菩薩を祀っていた。ある日、王氏は仏に妊娠祈願をした後、観音が彼女の夢に現れた。観音は丸薬を王氏に食べさせ、「これを飲めば、あなた達の善行の果報を与えましょう」と告げた。それ故に、両親は媽祖を観音から授かった子であると信じていた。

『天妃顯聖録』の「天妃誕降本傳」について、三点注意点がある。

- (1) 丸薬と優曇華の相違と母の名前の相違。例えば、「天妃誕降本傳」と異なり、『三教源流搜神大全』は、媽祖の母は、夢の中で観音菩薩から優曇華を食べさせられる設定である。¹⁵以下の文章に示されている。

明・萬暦年間で刊行された『三教源流搜神大全』

母の陳氏は、嘗て夢の中で南海に住む観音菩薩から優鉢花をもらい食うことがあった。その後、妊娠し、十四ヶ月を経て媽祖を産んだ。媽祖の誕生日は、唐代の天寶元年三月二十三日である。彼女は五歳の時、既に『観音經』を暗唱できた。

次に、観音と媽祖の関係の相違が挙げられる。諸版の「天妃誕降本傳」を比較すると、まず、道教の文献、例えば『三教源流搜神大全』、『太上説天妃救苦靈驗經』¹⁶には観音と媽祖との関係の設定が記述されている。時系列から考えると、媽祖が観音の化身であるという説は、宋代末期に既に萌芽が見られる。これに対し、媽祖が正式に道教の女神として道教經典に登場するのは明代の初期である¹⁷。しかし、『太上老君説天妃救苦靈驗經』を初めとする道教文献において採用されるのは「媽祖が観音の弟子である」というような設定である。おそらく、明代において、媽祖は、観音の化身というより、観音の弟子という説が流行していたと推測される。

¹³ 『莆田簞球林氏大宗譜・墓考』、pp. 20-21（付録 p.25 参照）

¹⁴ 「閩」は古代からの福建省の地域名である。ここで、媽祖の出身地を再び強調する。

¹⁵ 『三教源流搜神大全』（1980）、卷四・「天妃娘媽」條 p. 186

母陳氏、嘗夢南海觀音與以優鉢花吞之。已而孕，十四月始克娩身得妃。以唐天寶元年三月二十三日誕。五歲能誦觀音經...

¹⁶ 『太上説天妃救苦靈驗經』は『太上説天妃救苦靈驗妙經』に基づいて仏教要素を加えた書籍である。

¹⁷ これらの時系列についての詳細な比較は、張凱、修士論文→（2018）参照

次に、『天妃顯聖録』、『勅封天后志』、『天后聖母聖跡圖志』などの書物から見れば、家柄と子を受けることを強調し、秘法を観音から媽祖に伝授している。しかし、観音から秘法を授かることについて、この三つの書物は、媽祖が観音の弟子であることを提示しているとは考えられない。理由としては、例えば明朝に編集され、清初に刊行された『天妃顯聖録』の序文は、媽祖が観音の化身であることを示している¹⁸。

莆田の靈慈廟にある民国時代の壁画は、「観音指法・仙女降凡」をテーマとしている。この場合は「観音指法」と見なす。すなわち、媽祖は観音の弟子と見なされている。

(2) 同じく明代に初版が発行された『天妃娘媽伝』と『太上説天妃救苦靈驗經』との間には違いがある。

この二書は、同様に道教の要素を含む一方で、媽祖と観音の関係についても明示している。『天妃娘媽伝』「第二回 玄真女得佛真傳」に示される話においては、媽祖の前世は北天妙極星君の娘である。天界で観音菩薩に出会った際に、仏教の法門を授かったと記されている¹⁹。この伝承によって媽祖が観世音菩薩の弟子であるという説が定着したのである。一方で、『太上説天妃救苦靈驗經』は、「齊天聖后。観音化身。湄洲顯跡…」と述べて、明確に媽祖を観音菩薩の化身と見なしている²⁰。

(3) 媽祖の家柄について、媽祖の「龍女」という身分をめぐり、観音との関係の有無には論争がある。『天妃顯聖録』は莆田唐九牧林の一族を背景として記述しているが、媽祖を龍女として設定していなかった。つまり、媽祖が龍女とされるのは、観音菩薩の脇侍かどうかという論争である。

これには二つの見方がある。一つは、例えば『咸淳臨安誌』の「媽祖が龍女」という記述から、生前の媽祖を名門の莆田唐九牧林の一族と関連付けて、その一族に属する女であるとする見方である²¹。この名門は龍の一族と言われるから、子孫の媽祖も龍女と呼ばれるようになったという

¹⁸ 明神宗朝禮部尚書 林堯俞（莆田籍）、序文

天妃、吾宗都巡撫公之女也。……相傳謂大士轉身，其救世利人，扶危濟險之靈，與慈航寶筏，度一切苦厄，均屬慈悲至性，得無大士之遞變遞現於人間乎？

¹⁹ 『天妃娘媽伝』「第二回 玄真女得佛真傳」（1990）、段 1

「王母微笑言曰：「不同道。此乃逍遙之境。吾乃快樂之仙。汝何不南海見觀音菩薩，彼自有法授汝。」

²⁰ 『太上説天妃救苦靈驗經』（1992）p. 785

²¹ 林氏の系譜によれば、「唐九牧林」と「宋牧林」という二つの有名な支族がある。福建林氏の祖先は晋代の林禄である。唐代から宋代にかけて、門内の九人が次々に「進士」（皇帝が面接官を担当する試験に合格した者に与えられた資格）になった。唐玄宗の年間（712-755）には、その子孫である林披には九人の息子がいたとき

経緯がある。

『咸淳臨安誌』に次のように記されている：²²「媽祖は五代の閩王の統軍兵馬使であった林願の第六女であった。彼女は筵に乗って、海を渡る能力を持っていた。彼女は宋太宗雍熙四年（987）に湄洲の地から天に昇り、神になった。当時の人々は彼女を「龍女」と呼んだ」。

もう一つは、「媽祖は普通の漁家の娘」とする解釈である。蔣維鈞（1986）などによって、この解釈が指摘されている。この解釈は、媽祖と龍との関係を否定しつつも、媽祖は生前なんらかの不思議な力を持ち、その能力を用いて常に人々を助ける親切な女性であったという説である。筆者は、両方ともに決定的証拠に欠け、媽祖の身分については再考の余地があると考えている。

では、現存する「天妃誕降」をテーマする壁画から見ると、本論で考察してきた内容がどのように表現されているのだろうか。

媽祖信仰の源は中国福建省ということが認められ、福建省湄洲島の媽祖廟も祖廟と呼ばれるが、祖廟の「天妃誕降」は基本的に新しい描写である。媽祖の壁画の現存する状況について、宋元時代は媽祖の個人的な人物像と物語の一場面を描くものが残っている。明代から媽祖の伝説を述べる文献が続々と誕生していた。壁画や図像も前の時代より現存するものが多い（図2・図3参照）²³。

現存する壁画では、前述の『三教源流搜神大全』にある「嘗夢南海観音與以優鉢花吞之」に基づいて華を与える場面が多い。丸菓が描かれている場合もある。また、媽祖が誕生する時に観音は天上にいる場面がよく描かれている。たとえば、現代の天津天后宮大殿にある壁画（1994）『天后聖跡図』は、「天妃誕降」という場面を「感大士賜丸得孕」と命名している。

そして、壁画の素材として前に紹介した明清時代の四つの文献以外には、清代に流行した媽祖絵本もある²⁴。媽祖廟の壁画はそれらの文献の絵を参照しながら、制作された可能性が高い。

福建省楓塘宮の「天妃誕降」の参考資料として用いられた文献は、清康熙二十三年前後の『天后顯聖故事圖軸』であろう。『天后顯聖故事圖軸』は『天后顯聖録』の内容を参照しながら制作した絵本である。

れる。九人の名前は「林草、林藻、林著、林薦、林曄、林蘊、林蒙、林邁、林既」という。親子たちは共に刺史（別名「州牧」）の職に就く。なお林蘊は媽祖の祖先である。

²²潜説友（2012）、『咸淳臨安誌』は南宋の潜説友が編集した史料である。神為五代時間王統軍兵馬使林願第六女、能乘席渡海、人稱龍女。宋太宗雍熙四年（987）升化湄洲。...

²³（2007）『媽祖文獻資料彙編』p. 60

²⁴『天后聖母聖跡図志』、『天后聖母事迹図志』、『天后顯聖故事図軸』、『媽祖図志』などである。全て清代の絵本であるが、詳しい刊行年代は不明である。

福建省靈慈廟にある民国時代の壁画には、「観音指法・仙女降凡」という言葉が見られ、媽祖信仰が仏教と道教両方の要素を含んでいることを明白に示している。また、靈慈廟の壁画²⁵の、観音が龍女に媽祖を手伝えと命ずるという記述を見ると、媽祖と龍女を同一人物と見なしていないことが分かる。

以上考察したように、現存する媽祖の壁画や媽祖に関する図像における「天妃誕降」の場面を見る限り、媽祖と観音の間に密接な関係があることが明らかである。

おわりに

以上、「天妃誕降本傳」について、観音と媽祖の間に存在する関連性を検討した。内容を整理すれば、以下の通りである。

1、明代の道教文献『太上説天妃救苦靈驗經』と『三教源流搜神大全』などは、媽祖の誕生伝について、観音と媽祖の関係を残している。それらは『天妃娘媽伝』から多大な影響を受けており、同じく明代の『天妃顯聖録』と比較すると、『天妃顯聖録』は媽祖の家柄と両親を強調している。これに対して、『太上説天妃救苦靈驗經』と『三教源流搜神大全』は、『天妃顯聖録』よりも仏教的要素を強調している。

2、本論では詳細に述べていないが、筆者の現地調査によると、壁画の「天妃誕降」という場面は『天妃顯聖録』の内容を参照する場合が多い。したがって、「天妃誕降」では仏教要素のみを強調していると考えられる。例外的に、靈慈廟にある民国時代の壁画では、「観音指法・仙女降凡」という言葉が書かれている。

今、中国本土では媽祖信仰について、多くの研究が行なわれているが、仏教的要素を分析した研究は極めて少ない。しかし、媽祖信仰は、早い段階で仏教との関連性を既に持っていただけでなく、現代の媽祖信仰も仏教から色々なものを取り入れている。

現代の媽祖信仰を見ると、他の信仰や宗教思想との融合、あるいは習合がまだ続いていることが分かる。これまでの歴史と伝統を踏まえて、これからどのように現代社会に適応しようとしているのか、その動向と展開も今後の研究の視野に入れたい。また、『天妃娘媽伝』は媽祖伝奇類の中で最も知られたテキストであるので、翻訳出版を計画している。

²⁵ 「絵画卷・上編」『媽祖文獻資料彙編』（2007）p. 124 第 23・24 幅

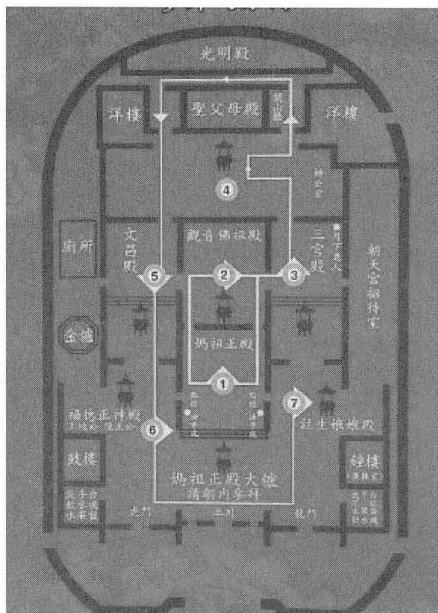


図1：朝天宮諸殿配置図



図2：福建省楓塘宮の壁画（清）

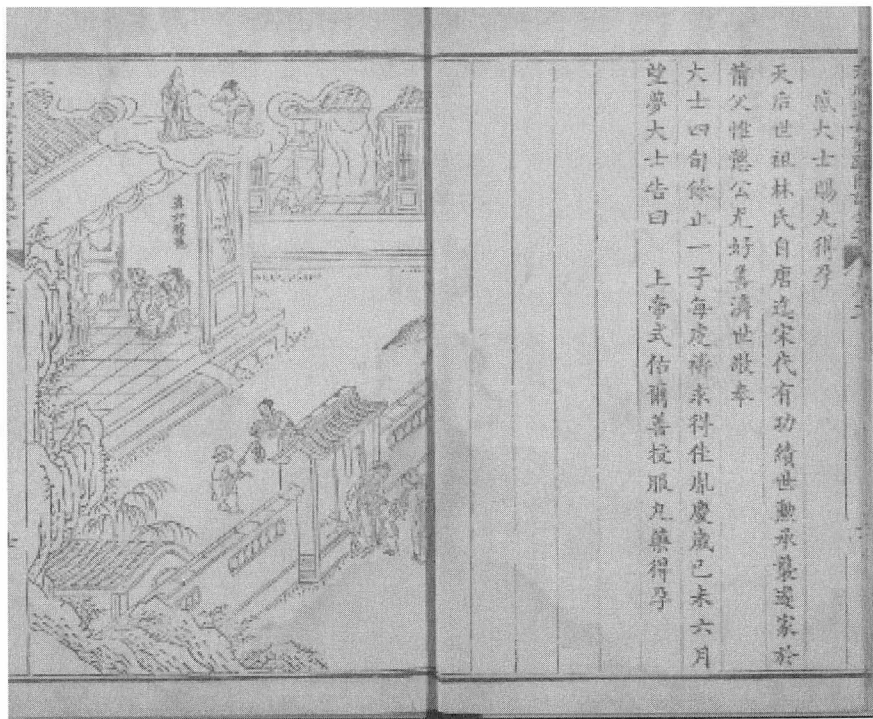


図3：『天后聖母聖迹圖志』（清）

参考文献

〔一次資料〕

- ・年代・撰人不詳『天妃顯聖錄』台湾銀行
- ・明初・撰人不詳
 - (1992)『太上説天妃救苦靈驗經』藏外道書（全36冊）第3冊、巴蜀書社
- ・撰人不詳
 - (1832)『天后聖母聖跡図志』2冊、寿恩堂藏版
- ・撰人不詳
 - (1892)『天后聖母事迹図志』2冊、中国歴史博物館に収蔵される
- ・唐代・林蘊
 - 『莆田簽球林氏大宗譜・墓考』（卷四）、pp. 20-21
- ・宋代・徐松
 - (1957)『宋会要輯稿影印本』中華書局
- ・宋代・洪邁
 - (1975)『夷堅誌』涵芬樓叢書本（涵芬樓藏新校輯活字本影）、中文出版社
- ・明代・吳遷初
 - (1990)『天妃娘媽伝』上海古籍出版社
- ・清代・張岳崧等
 - (1890)『瓊州府誌』（卷一至卷七）重修本之刊本、原書來源：哈佛燕京圖書館
- ・清代・盛炳緯
 - (1931)『鎮海縣誌』上海蔚文印刷局
- ・清代・劉佑修、清葉獻論等
 - 〔康熙〕『南安縣志二十卷』清康熙十壹年刻本、福建省圖書館
- ・清代・懷蔭布
 - (1882)〔乾隆〕『泉州府志七十六卷首一卷』清乾隆二十八年刻光緒八年重修本、福建省圖書館

〔書籍〕

彌永信美

- (2002)『觀音變容譚』（仏教神話学）法藏館

潜説友

- (2012)『咸淳臨安誌』浙江文叢

蔡相輝

(1988)『北港朝天宮誌』北港朝天宮董事会

(2006)『媽祖信仰的研究』[民95] 秀威資訊科技

(2016)『天妃顯聖錄與媽祖信仰』獨立作家

王景琳・徐劭

(1992)『中国民間信仰風俗辞典』中國文聯出版公司

积厚重

(2005)『観音與媽祖』稻田出版社

李献璋

(1979)『媽祖信仰の研究』泰山文物社

王秋桂

(1980)『三教源流搜神大全』台北經聯出版

王景琳・徐劭

(1992)『中国民間信仰風俗辞典』中國文聯出版公司

李露露

(1999)『華夏諸神: 媽祖卷』雲龍出版社

卢金城

(2012)『敕封天后志』莆田文化新聞局

周金琰、蔣曉前等

(2007)『媽祖文獻資料彙編』海風出版社

蔣維鈞

(2014)『紀念蔣維鈞文集』海風出版社

〔論文〕

吾妻重二、二階堂善弘編

(2008)『東アジア宗教之儀禮』雄松堂

鎌田茂雄

(1991)『観音経講話』講談社

彌永信美

(2002)『観音変容譚』（仏教神話学）法藏館

菊地章太

(2017a)「民間信仰と仏教の融合 — 東アジアにおける媽祖信仰の拡大をたどる」

『東アジア仏教学術論集』5、pp.29-47

(2017b)「媽祖崇拜の拡大と諸宗教との融合」『東洋学研究』54、pp.245-261

平木康平

(1984)「媽祖と観音：中国母神の研究（二）」『大阪府立大学紀要』32、pp.43-57

三尾裕子

(1995)「台湾の女神の女性性-観音菩薩・媽祖・註生娘娘」『アジア・アフリカ言語文化研究』48-49、pp.1-22

藤田明良

(2006)「日本近世に、おける古媽祖像と船玉神の信仰」『近現代日本社會的蛻變』中央研究院人文社會科學研究中心・亞太區域研究專題中心、pp.171-220

蔡相輝

(2009)「媽祖信仰宗教基因解密」参照『空大人文學報・第18期』

王福梅

(2010)「媽祖信仰與道教關係調查研究」『宗教學研究』4、pp.194-196

陳森鎮

(1993)「媽祖伝説是三教合一的產物」『理論學習月刊』pp.93-96

唐宏杰

(2015)「歷代媽祖神像鑑賞」『東方收藏』、pp.66-73

葉明生

(2009)「媽祖信仰與道教文化——民間道壇之媽祖信仰相關科儀及文化形態考探」『福建師範大學學報（哲學社會科學版）』3、pp.143-150

李豐楙

(1993)「媽祖与儒、积、道三教」『歷史月刊』pp.34-42

李世偉

(2019)「衆神之尊：近代觀音與民間諸神的信仰互動」『圓光佛學學報』、p.145-195

蔣維鈞

(1992)「“媽祖”名称的由来」『海內外文人論媽祖』、中国社会科学出版社、pp.137-139

譚世宝

(1996)「略論媽祖信俗的性質及中国學術与宗教的多元互化發展」、『嶺南文史』pp.44-48

周金琰

(2015)「淺論媽祖宮廟的管理」中華媽祖文化論壇

張凱

（2018）「神仏融合の信俗：媽祖信仰と中国仏教の関連性について」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』、pp. 59-78

〈キーワード〉

媽祖、観音、壁画、天妃誕降本傳

（博士後期課程）